

「体験から溢れ出た言葉で、私も勇気が」

MSW 高岡 良江

全身から伝えたい想いが伝わってきました。子ども達は悪くない。女の子は抜け出せない。薬物は大人がつくっている・・・「自分の回復のために活動をしている」内谷さんのその言葉が、ストーンと落ちてくる感じがしました。

自分のために生き、自分のために活動している。「自分の活動が他の人のためにもなったら、さらに嬉しい」それにも共感します。

内谷さんと、弟さん。現れ方は違っても、ご自身の経験を糧に、生まれ変わって今を生きておられるのは共通していると思いました。コンパクトに話してくださったけれど、それがどれほどのことなのか、私には表現する言葉がありません。

アディクションの多くは、背景に家族関係の課題があること。家族がアディクションの支え手になっていること。苦しいのはご本人だけではなく、見ている家族が苦しいということ。それぞれが、その立場での当事者であることが、まざまざと感じられました。

大切なのは回復の可能性とプロセスなのに、報道は、薬物をやっているかどうかばかりに焦点を当てる。薬物を止めた先に、依存する先がない。一度問題を起こしたら、新しい生き方を選択する術が社会にない。当事者は、そんな社会からの被害者かもしれないのに、立ち上がる仕組みをつくりあげることが、当事者がやらなくてはならない。

それは、他の問題にも通じています。

「芝居は心に残るけれど、形にはならない。だから映画をつくる」というのも、なるほどと思います。「内容なんか分からなくてもいい」。でも、すごく気持ちが伝わります。薬物は怖いから、逃げなさいってこと。それは、実はとても身近にあるよ、ということも。

「人は人と関わっていくことでしか生きていけない、人への依存が何かを生み出している」というのは、多くの人に受け止められるでしょう。

しかし、必要な依存先が、SNS にとって代わられる場面のある現実に、人間関係が難しく、肌で触れられる安心して相談できる相手が得にくいことが表れています。薬物依存は、自分とは関係のない世界だということではない。ひよんなきっかけから、自分が、あるいは身近な人も、足を踏み込んでしまうかもしれないことであって、その回復を支援する場が社会に少ないことも、決して他人事ではないのだと改めて思いました。そして、それを知っていることが大事だと思います。

恥をかく勇気、逃げる勇気、夢をみる勇気。体験から溢れ出た言葉で、子ども達だけではなく、私にも勇気を与えてくださいました。大切な生きた証。それを講義で聴かせてくださったこと、ありがとうございます。